

轉語なり、ツルとは其飛止共に群列あるをや云ひぬらん、また一には
タヅとは田鶴とまるせり、その平田に降り止るをいふにやあるらん、

〔倭訓栞都前編十六〕つる○中 鶴は鳴聲もて名くる成べし、田づも同じ歌に蘆鶴ひな鶴よるの鶴

などよめり、鶴は千年にして蓋松に安ずといふ、えそにさる、といふ、今丹頂真鶴、白鶴、黒鶴あり、
朝鮮鶴は對馬人の釜山浦にて捕る所也、朝鮮西土には食品とせずといひ、又琉球には鶴なしと
いへり、○中 明和九年の秋、伊勢一志郡にて鶴多く飛かけり、戦ひながら二羽落ぬ、つるくびは翹
首也、寶永の主上、新内裏へ遷幸ならせ給ふ、鳳輦の上はるかに、鶴の舞かけりけるを、諸臣千年の
ためしとて、賀し物し奉られけるに、從一位前内大臣源通茂公、

和歌のうらとしへてすめるあし田鶴の雲井にのぼるけふのうれしさ、○中 日光山に豐太閤
の放たれし鶴二三羽、野に四季ともに居て他に行かず、齊諧記に、仙人子安乘黃鶴而來と、伊勢安
濃郡の西郊に、黃鶴雌雄五七年が間來り下る、その後見えず、最美觀なりしと、家父の物がたりな
りき、

〔本朝食鑑〕水禽鶴和名可各反訓豆流

釋名、鶚音アシタ、葦鶴和名、丹頂俗稱、源順曰、唐韻、鶴別名也、楊氏抄、多豆、今按倭俗謂鶴為葦鶴是

集解、鶴大者高五六尺、長三四尺餘、嘴長六七寸而蒼黑、丹頂朱頰、赤目蒼脚、修頸凋尾、白羽玄翎、翅裏
小羽本白末黑、呼號鶴之本白、而造箭羽、或作茶會之帚、人人愛之、膝粗節高、指纖爪尖、天氣晴朗、和煖
清爽、則舞空而鳴、聲唳雲霄、以聞十里、常啄稻梁禾麥及根苗、或小魚蛙蝦菜草之根莖、亦食、故步于隴
畝、繞于水田、以宿水中、以棲野叢、其聲交而乳、乳時恐膝脚之損傷、而輕輕折膝、立時亦然、莊子所謂、脛
雖長、斷之則悲者、是也、竟巢于野叢、其卵如椰子大、一孕生四五子、或八九子、初黃毛、白嘴、短翼、長脛、而
淺蒼色、漸長、以作父母形、此呼號雛鶴也、別有黑白真鶴者、黑鶴者、白頸赤頰、紫黑脚、其係悉純黑也、
白鶴者、鵝赤紫黑、玄翎赤脚、其餘悉純白也、真鶴者、頂頸皆白、頰赤紫青、背後至胸腹悉黑、背至尾前、灰